発掘だより No.42

平成22年1月30日(土)発行

豊川市教育委員会生涯学習課

〒441-0292 豊川市赤坂町松本250番地(豊川市音羽支所内)

TEL0533-88-8035　FAX：0533-88-8038

史跡三河国分寺跡南大門の発掘調査

1はじめに

国分寺(金光明四天王護国之寺)は、仏教の興隆によって国家の安泰を願う護国思想にもとづき各国に国分尼寺(法華滅罪之寺)とともに奈良時代に建立された寺院で、聖武天皇による国分寺建立の詔が発布された天平 13(741)年頃より造営が始められました。三河国においては、現在の豊川市八幡町本郷及び竹下地内にその遺跡が所在し、近接する三河国分尼寺跡とともに大正 11 年に指定を受けた国指定史跡です。豊川市教育委員会では遺跡の保存を図る中で、国分寺を構成する伽藍建物の所在場所を明らかにするため昭和 60～63 年度にかけて発掘調査を実施し、この調査で金堂・講堂・塔・回廊・築地塀など国分寺を構成する主要な伽藍建物の遺構を検出しました。今回の調査は、昭和 60 年代の調査で検出に至らなかった伽藍建物を確認することにより、今後の史跡整備や遺跡保存を進める上での基礎データ収集を目的としたものです。平成 19 年度から３か年かけて調査を行い、今年度の調査では南大門の遺構を検出することができました。

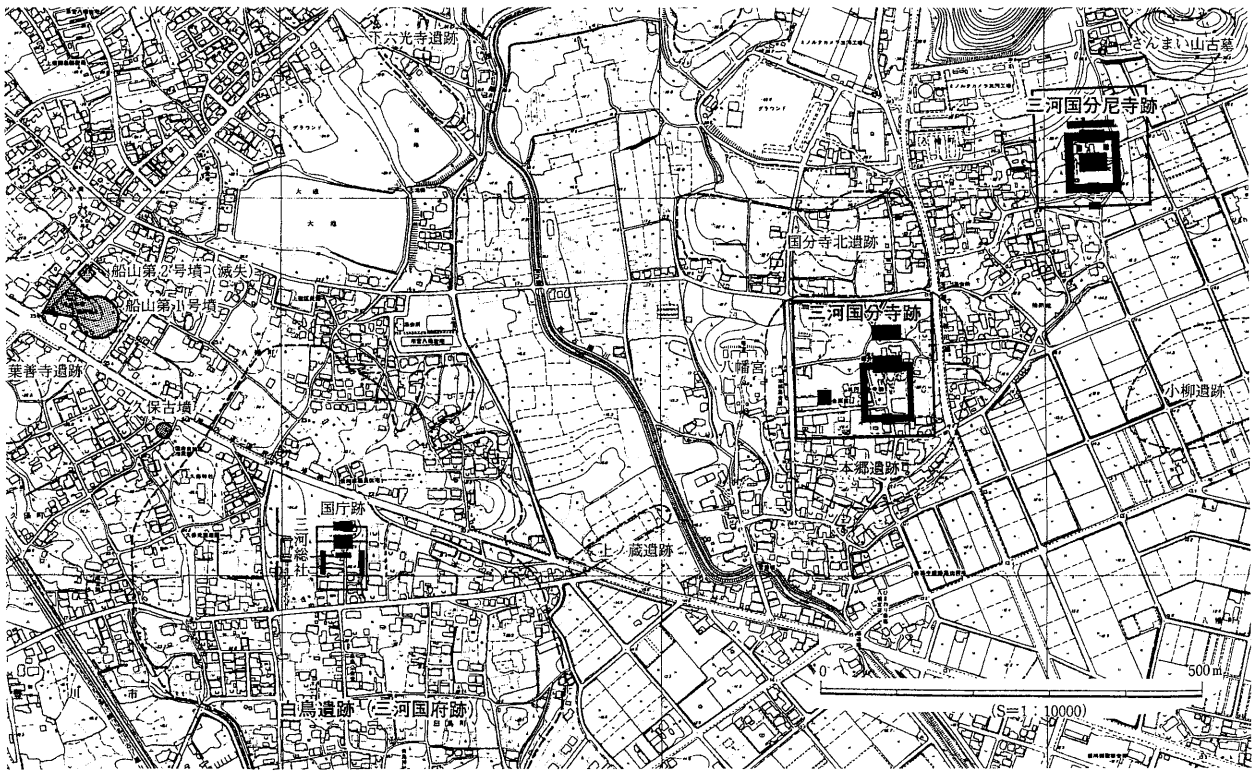


図1　三河国分寺跡周辺図

２三河国分寺跡の沿革など

三河国分寺に関する文献史料としては、承和 11(844)年に三河国から、今後読師を任命することをやめ、その布施の物を造寺料に充て、法会に際しては国分寺から僧侶を招いてこれを行わせたいとの申し出があり、勅によってこれを許可されたこと（『続日本後記』）、天延元(973)年の薬師寺金堂の鎮火の功績により僧神鎮が三河読師に任じられたこと（『薬師寺縁起』）などがありますが、往時の国分寺の状況を具体的に知ることのできる史料には恵まれていません。よって三河国分寺の様相を知る上では、発掘調査による考古学的な方法に頼るところが大きく、これまでの調査により聖武天皇による国分寺建立の詔が発布された天平 13(741)年頃より造営が始められ、律令国家の運営が行き詰る 10 世紀後半頃より各建物の修繕が行き届かなくなり、建物が荒廃し寺院機能が衰退していったと考えられています。

現在、三河国分寺跡には曹洞宗寺院の国分寺(現国分寺)が所在しています。この現国分寺は古代の国分寺の法灯を直接継いではいませんが、三河国分寺の跡地を意識して再興された寺院であり、『三河国宝飯郡誌』によれば永正年中(1504～1521 年)に西明寺(豊川市八幡町に所在)の機外和尚により再興されたといいます。現存建物で最古の本堂は棟札によれば元文２(1737)年の建立と推定され、境内の鐘楼に吊るされている銅鐘は三河国分寺(もしくは国分尼寺)の遺品であり、国の重要文化財に指定されています。

参考　三河国分寺銅鐘

東大寺鐘、讃岐国分寺鐘とともに古代の梵鐘で確実に国分寺で使用されたもので、大きさは高さが 137.9 ㎝、口径が 82.1 ㎝あります。その形態から製作時期は平安時代初頭と推定されています。竜頭の形が東大寺鐘と酷似しており、東大寺鐘を鋳造した工人が三河国分寺の地に出向いて製作した可能性も指摘されています。

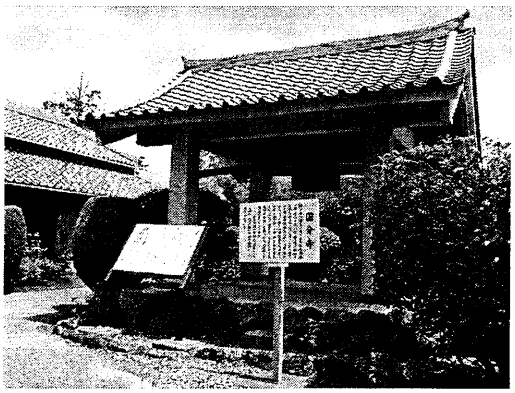


写真１　現国分寺鐘楼

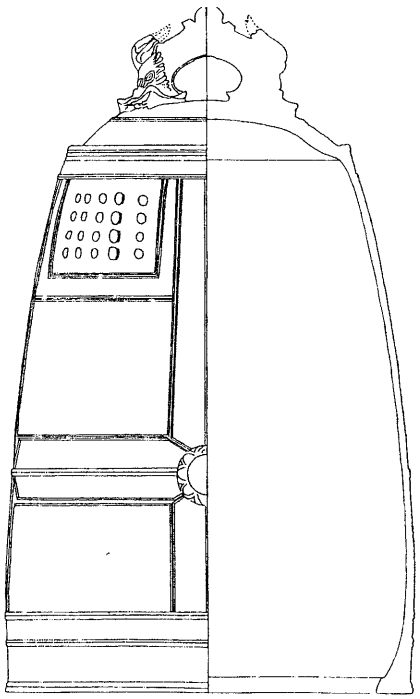


図２　三河国分寺銅鐘図

３三河国分寺跡の伽藍配置

三河国分寺の敷地（寺域）は約 180m四方で、周囲を築地塀で囲んでいました。寺域の東寄りに南大門・中門・金堂・講堂などの建物を南北一直線上に配置し、南西部に塔があります。その他にも寺域内にはまだ確認されていませんが、鐘楼・経蔵・僧房などの建物が存在すると考えられます。

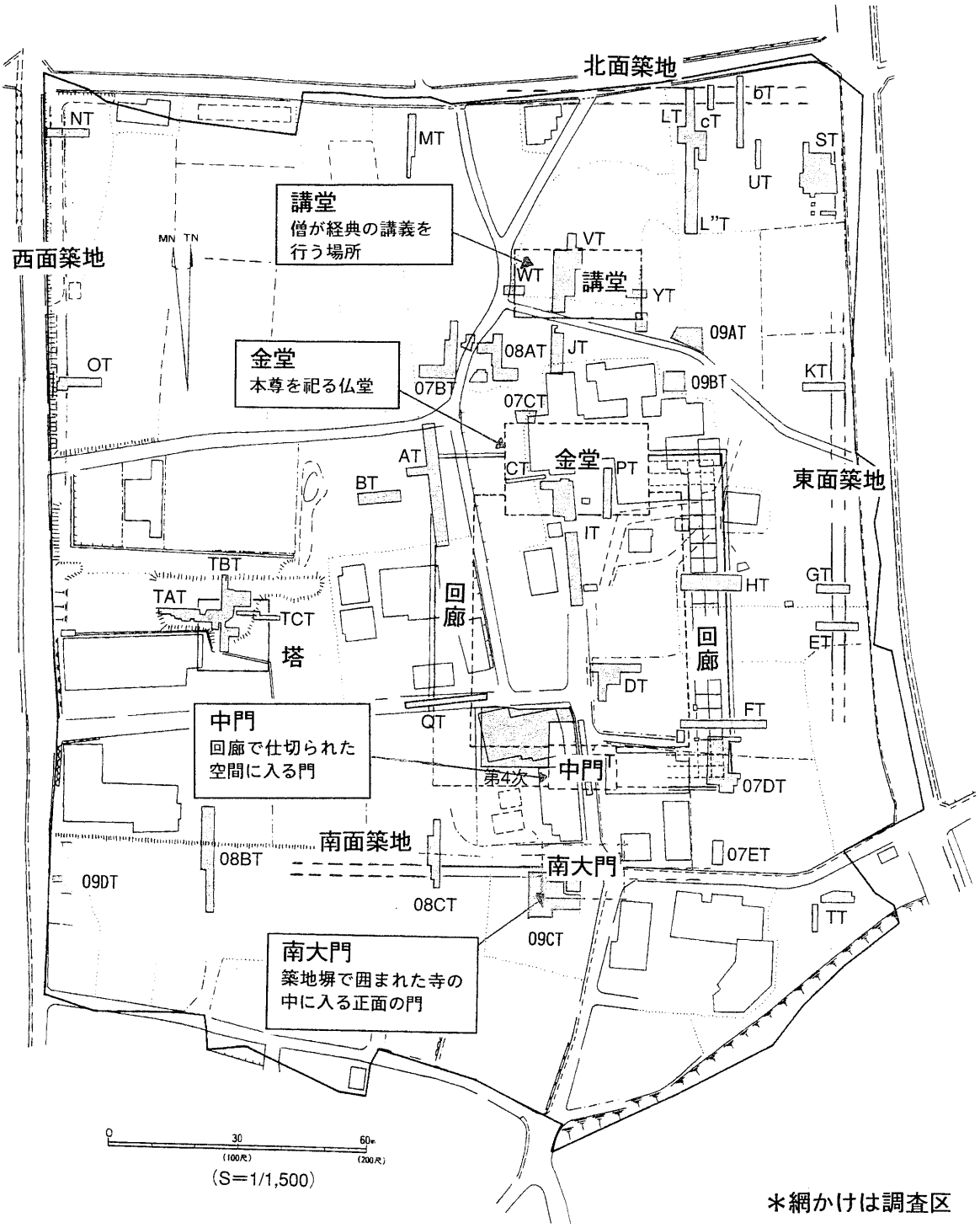


図３ 三河国分寺跡建物位置図

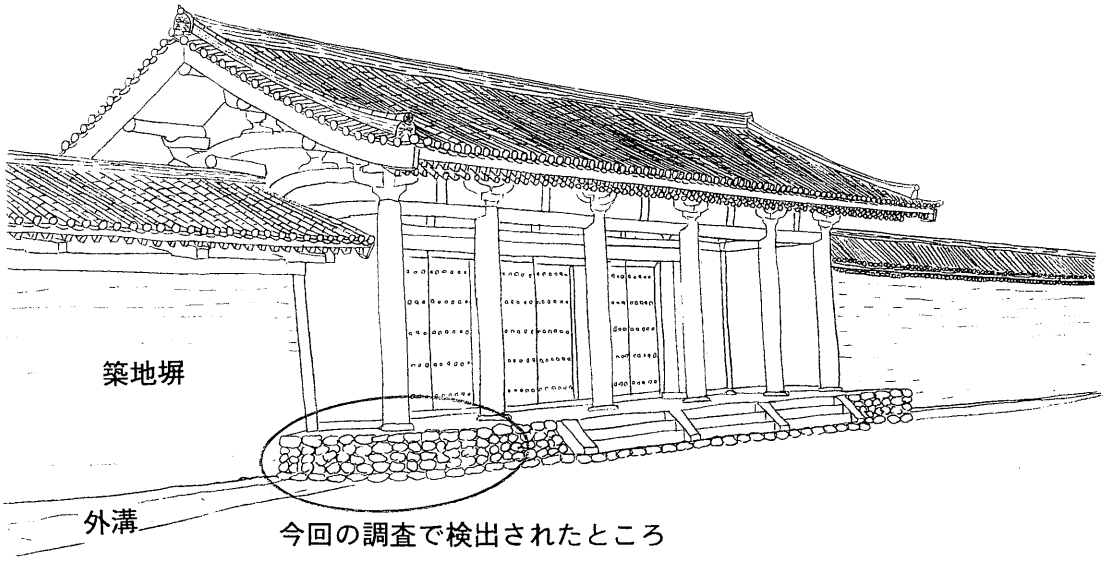
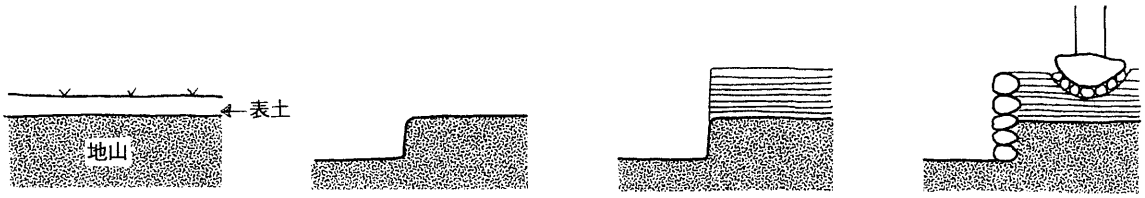


図５ 門と築地塀のイメージ図（三河国分寺南大門の復元図ではありません）



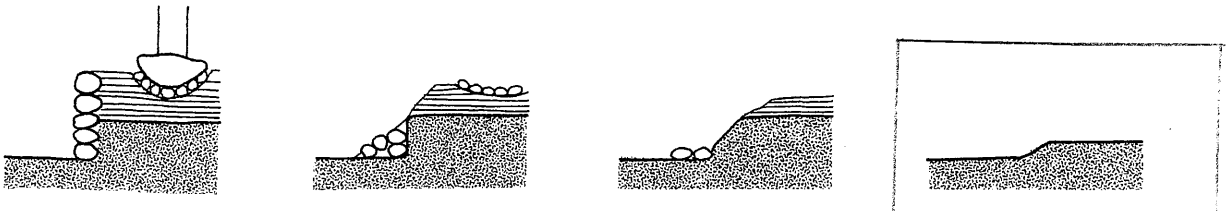
①基壇築成前

②表土をはぎとり、基壇の形に地山を削り出す

③削り出した地山の上に、基壇上面の高さまで土を積み固める

④基壇の外縁を石・瓦などで飾る。柱の位置を掘りくぼめ根石をしき、礎石を置く

図６ 基壇築成過程の模式図



①基壇存続時

②礎石が抜き取られ根石が残る。基壇が崩れ出す

③基壇がさらに崩れ、根石もなくなる

④地山の上に盛られた土が崩れ、地山の段差が残る

＊三河国分寺南大門はこの状態

図７ 基壇崩壊過程の模式図

４南大門調査の概要

古代寺院を構成する金堂・講堂・中門・南大門などの主要な建物は、一直線上(伽藍中軸線)に配置されることが多く、三河国分寺跡もこれまでの調査で同様であることが分かっていました。また、築地塀跡の位置から寺域の東西幅は約 180mで、周囲の地形から南北幅も 180mであろうことが想定されており、そのため北面築地塀跡からの距離と伽藍中軸線との関係から今回の調査区付近が以前より南大門の推定地とされていました。調査の結果、ほぼ推定通りの場所で南大門の南西コーナー付近の基壇が検出され、南大門に取りつく築地塀の外溝も確認されました。また、建物の屋根に葺かれた多量の瓦や寺で使われた須恵器や灰釉陶器などの土器が出土しました。

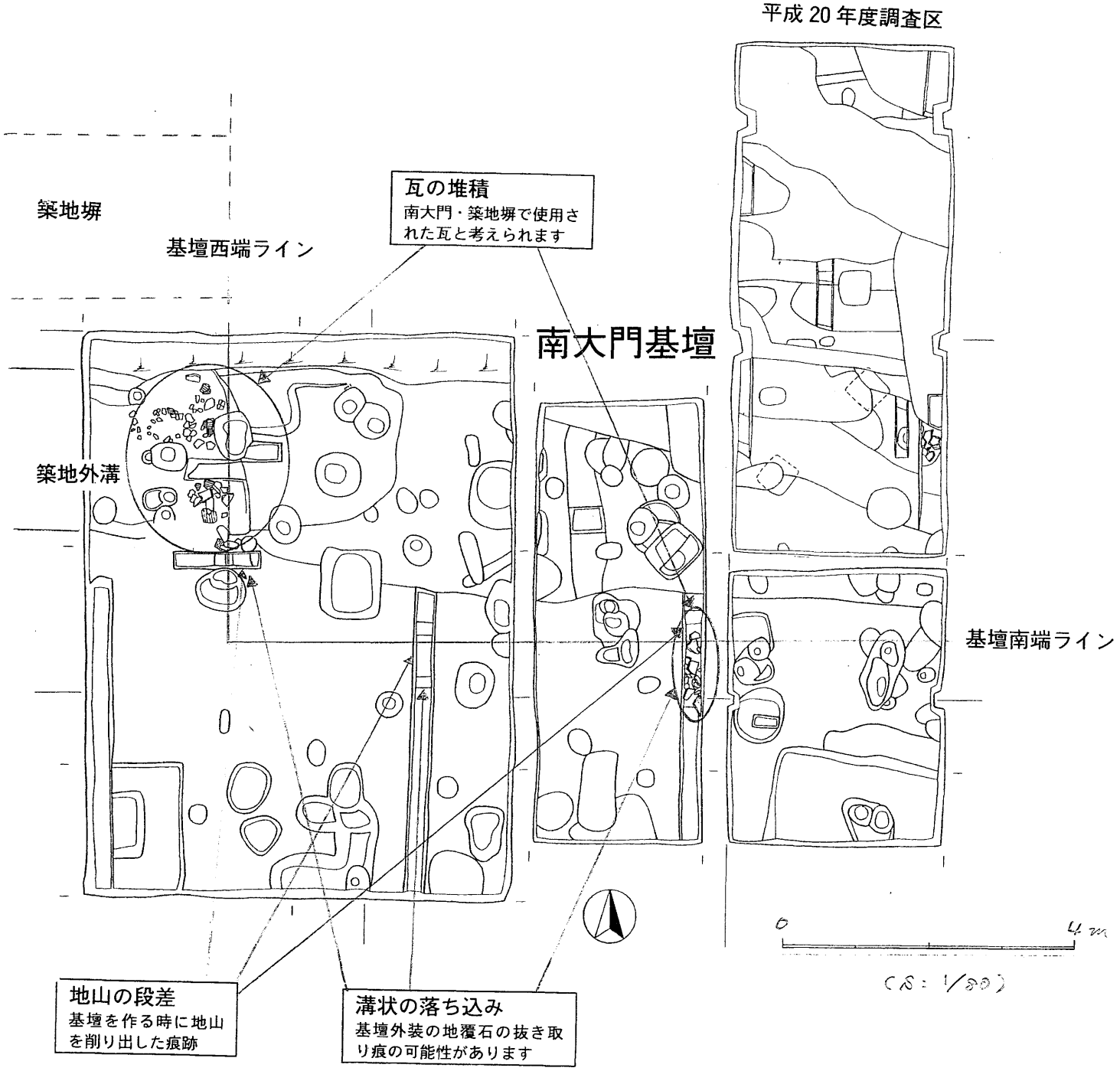


図４ 南大門調査区平面図

5まとめ

南大門は築地塀で囲まれた寺域の中に入る正面門です。南大門跡の検出によってこれまで推定であった寺域の南限ラインを確定することができ、かつ同様に推定であった寺域の範囲も 180m四方であることが判明したのは大きな成果といえます。ただし少し残念なのは、基壇の上部の削平が著しいため建物の柱を据える礎石の抜き取り穴や根石が検出できなかったため、建物自体の構造を知ることができなかったことです。伽藍中軸線の位置から推定される基壇の東西幅は約 17.4mであることや柱間の寸法等を考えると、右の写真の三河国分尼寺の中門のような三間門(八脚門)でなく、図５のような五間門が存在したのかもしれません。

また古代寺院の造営には、およそ 20 年以上の歳月が費やされたと考えられており、寺域内の建物がどのような順番で建設されたかも問題点としてあげられます。建物の建設順については、建物周辺で出土した軒瓦(軒先を飾る文様のある瓦)を分析するのが有効な方法で、三河国分寺跡では塔が優先して建設されたと考えられています。南大門の調査では軒瓦の出土が少なかったため、現時点ではその建設時期についてははっきりしません。今後の検討課題と言えるでしょう。

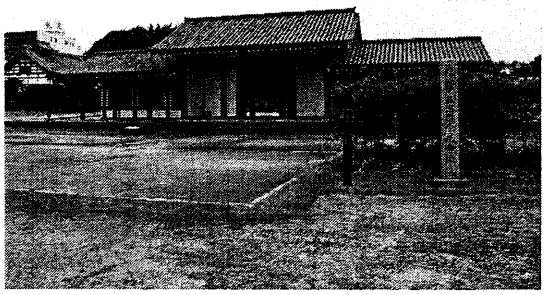


写真２ 三河国分尼寺跡中門復元建物

ご 案 内

三河国分寺跡の北東約 300m程の場所に、三河国分尼寺跡史跡公園があります。平成 17 年にオープンしたこの公園には当時の建物（中門・回廊）の復元建物や三河国分寺・国分尼寺・三河国府などの出土品を展示する三河天平の里資料館があります。ボランティアガイドによる説明もありますので、ぜひお立ち寄り下さい。